

学都屋台食談

第6回 株式会社山岸製作所 代表取締役社長 山岸 晋作氏

金沢で過ごす学生生活の意義や仕事観・人生観を、講師と学生が語り合う「学都屋台食談」を11月15日から11月25日にかけて、金沢市の片町中央味食街で開催しました。2006年から今年で14年目を迎えた食談で、講師の方々が語ったメッセージを紹介します。

Uターン後の金沢で、地域への関心が高まる

私は創業から83年の歴史を刻む、オフィス家具・ホームインテリアの会社の6代目社長を務めています。その前は、外資系のコンサルタント会社に勤めていました。15年前に、家業を継ぐことを前提に金沢へ戻つてきました。

コンサルタント会社は世界規模で、米国のワシントンDCや東京で勤務しました。ワシントンDCでは合衆国政府、東京では大手企業を担当し、貴重な経験をさせていただきましたが、金沢に戻つたことに後悔はしていません。金沢では、自社の経営以外でも、さまざまな団体に所属したり、経営者同士の交流の場に参加したりすることで、地域の将来に関わる役割を担う機会が少なくありません。生まれ育つた金沢に恩返しすることができるかもしれない。そんな最先端のダイナミズムを実感しているところです。

米国人の親友ができ、留学での大きな転機に

そもそも、米国へ行つた発端は、父親から「英語ぐらいは話せるようにならないと、将来生きていけないぞ」と強く言われたことがきっかけでした。

英語の習得には、かなり苦しました。き

ちんと聞き取れるようになるのに、数年かかりました。大学入学後に最初に入った寮では、ルームメートと意思疎通が全然できず、正直辛かったです。でも、次に入つた二人部屋の寮では、今も家族ぐるみで親交が続く米国人の親友ができました。ちょっと大きさですが、彼は自分にとって運命の人だと思っています。米国人の親友とは、お互いに助け合う関係を築きました。米国はよく個人主義の国のように言われますが、人と人の関係において、思いやりや自己犠牲が美德である点は日本どちら変わりません。世界中どこの国に行っても、そこは同じです。人が惹きつけられるのは英語の能力ではありません。相手と意思疎通しよう、相手を大切にしようとする「ここころ」が人と人を繋げるのです。英語は下手でも真の友達はできます。それを米国で学びました。



講師

株式会社山岸製作所
代表取締役社長

山岸 晋作氏

やまぎし・しんさく

1972年、金沢市生まれ。日本の大学を卒業後、米国のオハイオ州立大学経営学部に入学。卒業後はPwCコンサルティングに入社し、ワシントンDCや東京で勤務。04年に山岸製作所入社。専務取締役を経て、10年から現職。

国境を越えた友づくりは、人生の大きな財産

金沢独自の文化にふれることは外国人との交流にも役立つ

振り返ると、私は日本での学生時代は勉強に熱心なタイプではありませんでした。しかし、米国で必死に勉強し、友人ができ、仕事で認めてもらえるようになったことは、今につながる大きな自信となりました。米国行きを後押ししてくれた両親、米国での生活で親身になつてくれた親友に、深く感謝しています。



参加学生

前列左から西美智佳さん（金城大学4年）、荒木いちごさん（金沢美術工芸大学1年）、後列左から、笠間湧気さん（金沢大学1年）、氷室諒さん（金沢工業大学3年）、大綱るみ華さん（金沢大学2年）

海外留学の話題が多くなったので、最後に足元の金沢で学ぶメリットについてふれておきます。

金沢では茶道が盛んで、実は私もお稽古に通っています。お茶というと敷居が高いイメージが強いかもしれませんが、例えばお茶室には数多くの芸術品が並ぶ一方、茶事の一つ一つに作法の美しさとともになしのところが認められています。日本ならではの美意識に満ちた総合芸術として的一面があるのです。私は1年半前にお稽古に通い始めたばかりですが、それから金沢のことをずっと好きになりました。地域を愛するところは必ず伝わるので、金沢に来る外国人や県外の方との交流にも役立ちます。みなさんも金沢にいる学生時代に日本のこと、地域のこと、そして自身の誇りを自分の言葉で自慢できる、そんな体験を積み重ねることが将来、社会で役立つ人材になるために必要なことだと思います。



株式会社山岸製作所